

ネット社会におけるいじめの構造：現代の青年たちの友人関係構造に対する携帯電話の影響

代表研究者 池田 曜子 奈良女子大学大学院 人間文化研究科 博士研究員
 共同研究者 中山 満子 奈良女子大学 文学部 教授

1 はじめに

これまでの青年期の友人関係研究は、防衛的友人関係の観点から行われ、躁的防衛傾向が高く、友人との深い関わりや自己に対しての内省を避け楽しさを志向する、対人恐怖傾向が強く内省傾向が高いとされてきた。さらに、携帯電話などの新たなコミュニケーションツールが普及するにつれて、友人関係が変化してきたとされている。特に、携帯メールを使用する人ほど、孤独を恐れる傾向が高く（辻，2006）、人と人が知り合いになる出会いの場面ではなく、より関係が深まるふれあい場面において困難を感じるケースが増加しているともいわれている。

本研究では、携帯電話利用が一般化した状況（携帯電話を使用することによって、複数の場面、相手といつでもつながることができる）で形成される友人関係のあり方の類型化を試み、友人関係様式と個人特性、携帯電話に対する態度特性との関連を検討する。

2 調査方法

2-1 対象者・時期

平成23年6～12月にかけて、関西圏の大学生に協力を得て質問紙調査を行った。さらに、質問紙において了解を得られた学生に対して、現在の友人関係について半構造化面接を行った。調査協力者は322名（男性：182名、女性：140名）、平均年齢は20.19歳であった。

2-2 質問項目

- ① 友人選択理由・友人関係様式：石黒（1951）28項目と岡田（1993）24項目について、いずれの項目についても「親しい友人」と「親しくない友人」を想定し、あてはまる項目すべてに印をつけてもらった。
- ② ふれあい恐怖：20項目、5件法で回答を求めた（例：できることなら他人とはあまり関わりたくない、友人と一緒に食事をするのはいやだ）。
- ③ 孤独不安：8項目、5件法で回答を求めた（例：学校で一人だと周りの目が気になる、仲間外れになるのが怖い）。
- ④ 携帯電話利用頻度：22項目、6件法で回答を求めた（例：友人と一緒に会話している時、家に一人でいる時）。
- ⑤ 携帯電話利用状況：15項目、5件法で回答を求めた（例：着信がないか1日に何度も確認してしまう、一緒にいる友人が携帯電話を見ているといらいらする）。

3 調査結果：高校生

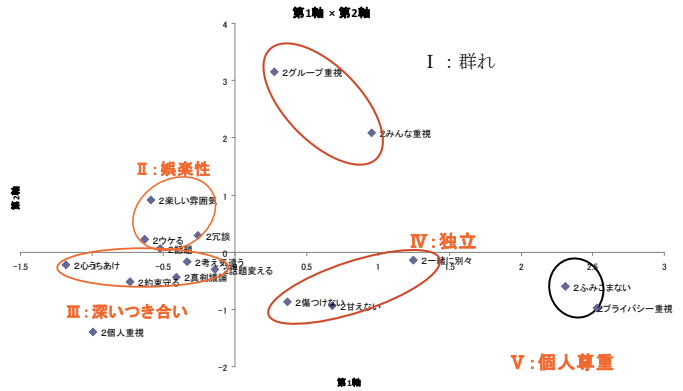
3-1 友人選択理由

携帯電話利用が一般化した状況での友人関係様式に関しては、林の数量化Ⅲ類の結果からクラスター分析を行い分類した。

結果、友人関係様式（親しい友人）では以下の5つに分類されることがわかった。

- I：群れ
 みんなでいつも一緒にしようとする
- II：娯楽性

- 表面的な楽しさを追求
- III：深い付き合い
気づかいあってはるが、心をうちあげ
真剣に議論したりする
- IV：独立
防衛的で、共にいても別の行動をとる
- V：個人尊重 (IVとVが対人退却群)

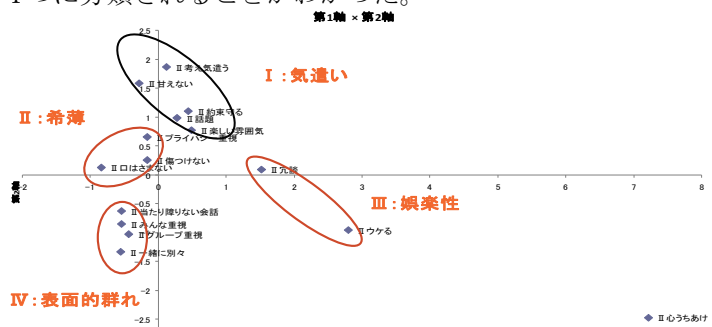


3-2 友人関係様式

これまでの先行研究においては、優しさ志向群が一番多く特徴的であるとされてきたが、今回の調査結果からは深い付き合いを尊重する友人関係様式も分類された。

対人関係様式（親しくない友人）では、以下の4つに分類されることがわかった。

- I：気遣い
表面的に楽しい雰囲気を保ち、
互いに気づかいあう
- II：希薄
対人退却群と似ている
- III：娯楽性
表面的な楽しさを追求
- IV：表面的群れ
優しさ志向群と似ている
しかし、気はあまり使わず、一緒にいることを重視しながらも、互いに立ち入らない。



親しくない友人との対人関係様式は、深い関係は望まないといったこれまでの先行研究で挙げられてきたような対人関係様式がみられた。

3-3 対人関係不安・携帯電話利用と友人関係のありかた

友人関係のあり方とパーソナリティ、携帯電話利用状況、携帯電話に対する態度の関連についての結果は以下の通りであった。

まず、友人関係状況と携帯電話利用に関して因子分析を行った結果、以下の因子を抽出した。

- ・ ふれあい恐怖 (2 因子)
 - ふれあい恐怖 1 (対人関係回避)
人と関わりたくない、人より物の方が気楽、友人と食事をするのは嫌、雑談が苦手
 - ふれあい恐怖 2 (表面的群れ)
友人という場でシーンとなるのが怖い、本音で傷つけられそうな気がする、みんなと一緒にいないと不安、友人とちょうど良い距離をとることが難しい
- ・ 孤独不安：1 因子
仲間外れになるのが怖い、いつも誰かとつながっていたい、周りのみんなから「いい人」だと思われたい、学校で一人でいると周りの目が気になる
- ・ 携帯利用頻度の測定：1 因子
- ・ 携帯利用状況の測定 (3 因子)

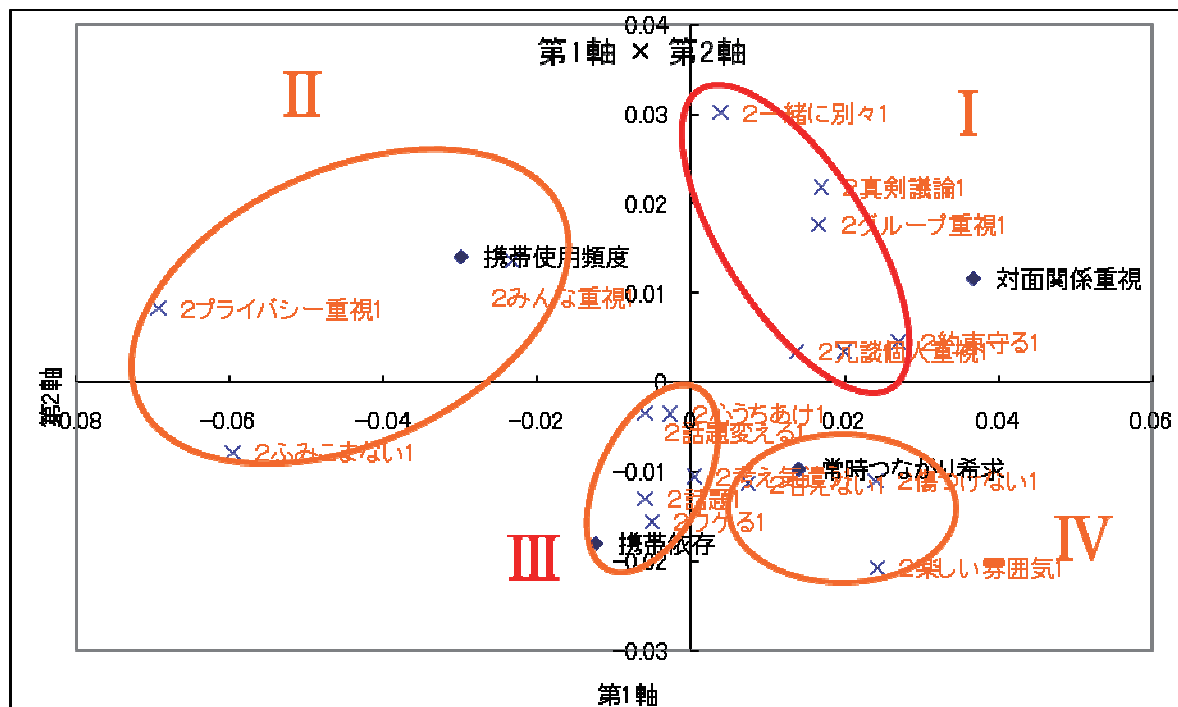
携帯依存

- 携帯なしの外出は不安でたまらない、携帯忘れたら遅刻しても取りに戻る連絡できる安心感
- 常時つながり希求
- 着信ないか何度も確認、メールが来ないといらいらし落ち込む、友人の前でもメール、電話
- 対面関係重視
- 自分の話しているとき、前で、友人が携帯電話を見るとイライラする

抽出された因子を用いて、携帯電話利用と友人関係様式との関連について双対尺度法の結果クラスター分析を行い分析した。

この分析において使用した友人関係様式は、携帯電話で日常的に連絡を取り合ったりする相手は、通常親しい友人相手であると考えられるため、親しい友人の友人関係様式の結果を用いて行った。(親しくない友人の場合は、解釈可能な結果が出なかった。)

その結果、以下の4つの分類が見出された。



I：対面関係を重視傾向の強い場合

友人が自分の前で携帯電話を見ているとイライラする傾向のある人は、グループで付き合うことも重要であると考えているが、その中で個人個人の友人との付き合いを重視し、真剣に議論し、約束事を守るなど規範意識が高い傾向がある。

II：携帯使用頻度の高い場合

表面的群れ志向が強い。

III：携帯依存傾向の強い場合

友人という時は表面的に楽しい雰囲気を保ちながらも、相手に対して話題を変えながら心を打ち明けようとする傾向がみられる。

IV：常時つながり希求の強い場合

常に友人とつながっていたい傾向がある人は、相手に気を遣いながら友人関係をつくる傾向にある。

4 調査結果：大学生

4-1 友人選択理由

携帯電話利用が一般化した状況における友人選択様式について、親しい（近い）友人と親しくない（遠い）友人に関して、クラスター分析を行い分類した。

親しい友人に関しては、一緒にいることが多く、趣味や気が合い、共にいると面白い「表面的雰囲気」群と、さらに意見が合い、相互に尊敬しあって欠点を指摘しあうこともある「類似・関係性」群の2群が抽出できた。抽出された2群に共通してみられる特徴は、友人との時間を共有し、ある程度気が合うと感じられているということである。しかし、それだけが友人選択の理由とする「表面的雰囲気」群に対して、「類似・関係性」群は、深い関わりや自他共に内省する機会が持てることを、親しい友人には求めている。

親しくない友人に関しては、2群が抽出できたが、大部分が「受動的功利性群」に分類された。この群は、趣味や意見の一致などの類似性は求めない代わりに、物の貸与や相手が優秀であることを友人選択の理由としており、加えて友人の方から関係性をもつことを求めている群である。非常に少数であるが抽出されたもう1群は、類似性はあまり求めないが、互いに尊敬しあって欠点を指摘し合う関係を求める「受動的関係性重視群」が抽出された。

それでは、各群はどのように関係しているのだろうか。

表1 友人選択理由の類型 (%)

		親しくない友人	
		受動的功利性 (n=307)	受動的関係性 (n=12)
親しい友人	表面的雰囲気 (n=184)	98.9	1.1
	類似・関係性 (n=129)	93.0	7.0

表1からわかるように、親しい友人選択におけるどちらの群も、大部分が親しくない友人に関しては「受動的功利性」群となっている。ここから、大学生の大半は、友人選択において親しい友人と親しくない友人を明確に区別していることがわかる。しかし、親しい友人に対して深い関わりを求める「類似・関係性重視」群においては、少数であるが友人をあまり区別せずに選択している様子が見えてくる。

4-2 友人関係様式

ここまで、友人選択についての分析結果から、大学生は友人を一定の基準で友人を選択するのではなく、友人との親密度によって選択基準を使い分けていることがわかった。

それでは、友人関係のありかたはどうだろうか。親しい友人とのつきあい方においては3分類が抽出された。集団で行動するよりも個人的な付き合いを重視し、内面を打ち明けたり真剣な議論をしたりする「個別・深い付き合い」群、深い付き合いをしつつも同じ場においても、別々のことをすることがあり互いのプライバシーにはふみこまないように気をつけている「個別・気遣い」群、個人的な付き合いをせずに、親しい友人であっても相手に合わせて話題を変え、話題に取り残されないように気を遣いながら、議論をしたり楽しい雰囲気を保とうとしたりする「並列・相手中心」群である。

現在の大学生は深いふれあいを恐れ、表面的な友人関係のみを形成しているわけではない。親しい友人に対しては、すべての群に共通して心を打ち明け真剣に議論を行うという特徴がみられる。よって、深い付き合いをしながらも、それ以外のどのような部分を重視しているかが各群の違いとなってくる。

親しくない友人関係のあり方は、2分類抽出された。個人的なつきあいよりも集団でのつきあいを優先し、互いにふみこまず当たり障りのない会話を行う「表面的群れ」群、集団優先でふみこまない関係に加えて、傷つけないように話題を変えたり考えを気遣ったりする「気遣い・表面的群れ」群である。

それでは、各群はどのように関係しているのだろうか。

表2 友人関係様式の類型 (%)

		親しくない友人	
		表面的群れ (n=234)	気遣い・表面的群れ (n=77)
親しい友人	個別・深い付き合い (n=267)	76.0	24.0
	個別・気遣い (n=24)	76.2	23.8
	並列・相手中心 (n=31)	67.9	32.1

表2からわかるように、親しい友人関係において、集団での関係よりも個人的な関係を築こうとする「個別・深い付き合い」群と「個別・気遣い」群は、親しくない友人とは一線を引き互いにふみこまない表面的な関係を保っていることがわかる。しかし、親しい友人関係であっても相手に合わせようとする「並列・相手中心」群は、心を打ち明け真剣な議論を行わない以外は、親しい友人と同様の対応を親しくない友人に対してもとっている。

以上の結果から、友人選択様式、友人関係様式どちらにおいても、大学生の大部分は、どのような友人に対しても一定の友人関係を作ろうとするのではなく、親しい友人と親しくない友人を明確に区別し、親密度の違いによって友人関係形成基準を変化させていた。しかし、親しくない友人をはっきりと区別せず、親しい友人と同様に気遣う傾向がみられる大学生も一定数存在していた。

それでは、友人との距離感における選択基準と形成基準をあまり変化させない大学生は、互いにどのよう

に関係しているのか確かめておきたい。

表3 友人選択理由と関係様式(親しくない友人) (%)

		関係様式	
		表面的群れ (n=234)	気遣い・表面的群れ (n=77)
選択理由	受動的功利性 (n=307)	76.9	23.1
	受動的関係性 (n=12)	27.3	72.7

表3からわかるように、友人選択基準と関係性の基準は互いに関係がある。よって、現在の大学生は、友人との関係形成に複数の基準を持つ者と、単一の基準しか持たない者が存在している。

従来の友人関係では、友人とは深いつきあいをもついわゆる「親友」ととらえられていたが、現在の大学生の多くが友人の範囲を広げ、多様な関係性を複数の友人と形成していることがわかる。互いの深い内面を共有し合うような「親友」だけを友人ととらえる関係はほぼみられず、むしろ単一の基準で友人関係を形成する大学生は、その関係に対して非常に気を遣い、互いを傷つけないようにしているのである。

4-3 対人関係不安・携帯電話利用と友人関係のありかた

ふれあい恐怖と孤独不安に関しては、因子分析の結果4因子を採用した(対人関係回避、孤独不安、対人関係恐怖、孤独回避)。

携帯電話利用に関しては、因子分析の結果、使用頻度は、4因子を採用した(並列利用、単独時利用、他者発信利用、自宅他行為中利用)。利用状況は、3因子を採用した(携帯依存、対面関係重視、常時つながり希求)。

それでは、これらの因子と友人関係のありかたはどのように関わっているのだろうか。

表4 対人関係(表面的群れ)

	対人関係恐怖	孤独不安	孤独回避
対人関係回避	.384 **	.130 *	.030
対人関係恐怖		.346 **	.081
孤独不安			.254 **

表5 対人関係(気遣い・表面的群れ)

	対人関係恐怖	孤独不安	孤独回避
対人関係回避	.299 *	.090	-.180
対人関係恐怖		.110	.190
孤独不安			.360 **

まず、対人関係のありかたに関しては、複数基準で友人関係を形成する「表面的群れ」群と単一基準で友人関係を形成する「気遣い・表面的群れ」群では、表4、表5のような結果となった。

「表面的群れ」群は、話題に困ったり、沈黙が怖いという「対人関係恐怖」と「対人関係回避」「孤独不安」に、「孤独回避」と「孤独不安」に相関関係がみられた。彼/女らは、多様な友人関係をできる限り円滑に行うために、様々な不安感を抱いているのではないかと考えられる。しかし、「気遣い・表面的群れ」群は、「孤独回避」と「孤独不安」にのみ相関関係がみられ、友人関係において仲間外れにならないことだけが不安であるということがわかる。

表6 携帯電話利用（表面的群れ）

	並列利用	他者発信	自宅他行為中	携帯依存	対面関係重視	常時つながり希求
単独時利用	.348 **	.511 **	.446 **	.377 **	.013	.120
並列利用		.434 **	.557 **	.337 **	.087	.238 **
他者発信			.470 **	.446 **	.130	.295 **
自宅他行為中				.350 **	.055	.296 **
携帯依存					.226 **	.344 **
対面関係重視						.118

表7 携帯電話利用（気遣い・表面的群れ）

	並列利用	他者発信	自宅他行為中	携帯依存	対面関係重視	常時つながり希求
単独時利用	.328 **	.526 **	.617 **	.148	-.280 *	.370 **
並列利用		.327 **	.315 **	.354 **	-.185	.158
他者発信			.386 **	.339 **	-.107	.284 *
自宅他行為中				.089	-.107	.364 **
携帯依存					.154	.123
対面関係重視						.072

つぎに、携帯電話利用に関しては、複数基準で友人関係を形成する「表面的群れ」群と単一基準で友人関係を形成する「気遣い・表面的群れ」群では、表6、表7のような結果となった。

「表面的群れ」群は、常に誰かとつながるために用事がなくてもメールを複数の相手に送信するなど、非常に携帯依存傾向が強い反面、対面関係も重視する面もみられる。これは、複数の基準で多様な友人関係を築いている結果であると考えられる。ところが、「気遣い・表面的群れ」群は、他者と共にいる時のみ携帯依存傾向が強いため、対面関係はあまり重要視しない結果となった。これは、自分だけでなく友人に対しても常に距離を置き、互いにできるだけ立ち入らないようにしながら友人関係を形成しているためではないだろうか。

4-4 半構造化面接の結果

多数派であった親しい友人とは深い付き合いをするが、あまり親しくない友人とは表面的な付き合い方をするタイプは、携帯電話の利用を含めて見ると、表面的な友人とも常に友人関係を保っておかないと思っていなかった。このようタイプは必然的に、携帯電話を多用している。結果、対面関係は実際はあまり重視しておらず、誰かと一緒にいるときも携帯を手から離すことがほとんどないというような状態になる。

このタイプの語りは、以下のようなになる。

「俺、大学入って半年・・・くらいですけど、たぶん友だちは100人ぐらいできたと。一人暮らしなんで、ひとりの時は誰かにメールしたり。あとは地元の友だちとskypeですね。」(18歳・男性)

「ひとりでいるのがものすごく苦手なんです。なんで、常に用事入れるようにしてます。3回生の時、急に思いついて。今までなんとなく知り合って、[携帯の]アドレスとか番号だけ登録してた人全員に連絡しまくったんですよ。だって、せっかく色んな人と仲良くなってなんか得られるかもしれないのに、もったいないですよ。で、今は絶対毎日予定入れるようにしてます。ひとりで下宿にいる時間は1分でも減らしときたいんで。」(22歳・男性)

「友だちといる時、携帯いじられてても全然気にならないですね。私もやってるし。それに、なんかいじってないと落ち着かないんですよ。いつも持ってるから。あっちも気にしてないと思うし。」(21歳・女性)

以上のタイプは、大学入学後半年で100人も友だちができたり、さらにひとりでも誰かと常に繋がったりするために、skypeやメールを多用している。そして、対面関係においては、自分もやっているけど向こうもやっているため、このような態度でお互い接するという点に関しては何の違和感もないと考えている。

少数派となる、互いに気遣いながら深い関係を作ろうとするタイプは、どのような人とも気を使いながら付き合いおうと考えているため、対面関係において面と向かってきちんと話をしたい、お互いどういふことを考えているのかちゃんと知りたいと思っている。よって、ひとりである時も用事もなくメールするというようなことは不自然な気がすると語る。

「携帯は、ほとんど使いませんね。電話は嫌いだし、メールもめんどくさいんで、ほんと用事ある時だけって感じで。友だちと一緒に時は、相手がもし携帯みてたら、ものすごく気になります。なんで見てんのって聞きます。」(22歳・女性)

「友だちという時は、その時の空気とか、相手の話大事にしたいし。友だちとの関係って、めっちゃ深いのがいいんですよ。俺、大学入って彼女と別れて泣いちゃったんですよ。それでも、全然態度変わらんと接してくれて。こいつは親友やって思いましたね。携帯じゃなくて、一緒にいなかったらこんな感じにならんとします。」(18歳・男性)

「友だちとは、深い話したいんですよ。いろんな議論とか。それやのに、なんか[携帯電話を]いじってたら、私といんのおもしろくないかなあって。これまでのこと[高校時代の経験]もあるんでやっぱりこの人とはムリやと。」(22歳・女性)

以上のタイプは、友だちが携帯電話を触っていることが嫌なのではなく、もし何か重要な用事があったりして携帯電話で連絡しているというなら構わないが、どうでもいい事で自分と話しているときに見ているというのはなんだかとても自分のことを大切に思われていないと不安になるという風に話す。そして、暖かい友人関係を形成するためには、携帯電話だけでは不可能であり、面と向かって友人関係を形成することによって可能にあると語っている。

5 考察

青年期の友人関係のあり方は、これまでの先行研究では防衛的な友人関係である優しさ志向群と群れ志向群が一番多く特徴的であるとされてきたが、本研究結果からは、親しくない友人関係においては同様の結果となり、親しい友人関係においては、さらに深い付き合いを尊重する友人関係様式がみいだされた。

そこで、現在の青年期の若者は、友人との親密度によって選択理由や関係様式を明確に分けているタイプと、自己開示以外ほどの友人とも同様のつき合い方をしているタイプの2類型がみいだされた。

さらに、親密度によって友人関係のあり方を変化させている、友人関係様式にかんして複数の基準を持っているタイプは、多様な友人関係を形成、維持するために対人関係において様々な不安を抱えており、そのために携帯電話を多用するだけでなく対面関係も重要視していることがわかった。それに対して、友人関係のあり方をほとんど変化させない単一の友人関係様式を持つタイプは、対人関係に関する不安は集団の中で一人になってしまわないかということだけであり、友人と共にいる時も決して立ち入りすぎないように気を遣っているため対面関係を避けながら友人と共に過ごしていることがわかった。そして、対面関係を深めずに共に過ごすために携帯電話を利用しているのである。

以上の結果から、現在の青年期の友人関係は、一見、表面的な浅い人間関係を形成しているようにみられがちであり、実際、表面的な友人関係は全ての学生によって形成されている。しかし、大部分の学生は、それだけの関係だけではなく親密な友人関係も並行して形成しているのである。このような関係のあり方を支えているのは、常に複数の相手とつながることのできる携帯電話というツールであり、このように関係性のあり方は今後さらに通信方法のあり方と共に変化していくと考えられる。

【引用文献】

辻大輔 (2006) つながりの不安と携帯メール. 関西大学社会学部紀要 37(2) 43-52.

岡田勉 (1993) 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係. 発達心理学研究 4(2) 162-170.

岡田勉 (1993) 現代青年の友人関係に関する考察. 青年心理学研究 (5) 43-55.

〈発表資料〉

題名	掲載誌・学会名等	発表年月
青年期の友人関係における携帯電話利用の影響	日本発達心理学会第22回大会	平成23年3月

大学生の友人関係のありかた:2つの 類型から	奈良女子大学「差異と交感の 人間学プロジェクト」公開シン ポジウム	平成 23 年 12 月
大学生の友人関係における携帯電話 利用の影響	日本発達心理学会第 23 回大 会	平成 24 年 3 月
大学生の友人関係における携帯電話 利用の影響	『奈良女子大学 差異と交 感の人間学プロジェクト報告 書』	平成 24 年 3 月